

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	A型肝炎	www.47news.jp/CN/201004	国立感染症研究所により、A型肝炎の患者が平成22年3月以降に増加していることが報告された。A型肝炎ウイルスに汚染した水や食材の摂取によって感染する可能性を懸念して、魚介類の十分な加熱など、注意を呼びかけている。4月18日までの合計(速報値)は121人で昨年の報告数115人を超えている。11日までの5週間の81人について、年齢は20～88歳、2例が劇症化し、うち1例が死亡した。福岡県、広島県などが多く、報告医師が推定した原因食材は「カキ」が45%と最も多かった。
2	B型肝炎	J Infect Dis. 2010 Jul 15;202(2):192-201.	広範なB型肝炎ワクチン接種後の、米国におけるHBV感染の状況について傾向について検討された。1999-2006年と1988-1994年の2期間、米国健康・栄養調査において6歳以上を対象に、HBc抗体、HBs抗原及びHBs抗体の検査が実施された。感染率の概算は加重及び年齢調整された。その結果、1999-2006年間の、年齢調整後のHBc抗体(4.7%)とHBs抗原(0.27%)の感染率は、1988-1994年(各5.4%及び0.38%)であり、統計学的に違いはなかった。2期間のHBc抗体の罹患率は、6-19歳(1.9%から0.6%)、及び20-49歳(5.9%から4.6%)では減少したが、50歳以上では(7.2%及び7.7%)変化がなかった。1999-2006年のHBc抗体の感染率は、非ラテンアメリカ系白人(2.8%)やメキシコ系アメリカ人(2.9%)より、非ラテンアメリカ系黒人(12.2%)と他の人種(13.3%)で高く、また米国出生(3.5%)より外国出生(12.2%)の方が高かった。米国出生の6-19歳(0.5%)では、人種や民族性による違いがなかった。米国出生と外国出生の子供では1988-1994年(1.0%対12.8%)より、1999-2006年(0.5%対2.0%)の方が小さかった。また、6-19歳では、56.7%がワクチンによる獲得免疫を持っていた。米国の子供におけるHBV感染率の減少から、世界的及び国内のワクチン接種の効果が反映されているが、一方で、成人におけるHBV感染率の状況はほとんど変わらず、およそ730万人(95%信頼区間、550万-940万人)の米国に在住者は慢性的に感染していると説明している。
3	B型肝炎	Pediatr Infect Dis J. 2010 May;29(5):465-7.	慢性B型肝炎患児の唾液中のB型肝炎ウイルス(HBV)の水平感染が伝播手段となっている可能性を検討するために、慢性B型肝炎患児を対象に唾液中及び血漿中のHBV量の関連性が検討された。デンマークにおいて2006年5月から2008年11月間で、慢性B型肝炎患児(0～16歳)46人由来の唾液と血液中のHBV-DNAをTaqManPCR法にて定量した(検出感度は50 IU/mL)。その結果、本研究中にHBe抗原が陽性から陰性になった2人と、HBe抗原の状態が分からない1人を調査対象外とした25人(58%)がHBe抗原陽性で、18人(42%)がHBe抗原陰性であった。HBe抗原陽性の唾液中のHBV-DNA濃度は、HBe抗原陰性の血漿中のHBV-DNA濃度より高かった(39倍)。唾液がHBVの伝播経路になっていることが示唆された。
4	B型肝炎	Transfusion. 2010 Jan;50(1):65-74. Epub 2009 Aug 26.	台湾において微量のB型肝炎ウイルス(HBV)DNAを検出目的とした個別検査とミニプール検査の有効性について報告された。台湾では、財政的な問題でルーチンの血液スクリーニングとしてNATの実施が制約されている。そこで、Ultrio分析(HBV、HCV、HIV)を用いて、実施可能な検査として個別供血検査(IDT)及び4本のミニプール(MP4)の実施成績を評価した。供血者10,290名(IDT 4210名、MP4 6080名)を対象に潜在的HBV陽性供血者(HBs抗原陰性/NAT陽性)を最高9か月間、追跡調査した。Ultrio分析とHBs抗原検査結果が不一致の場合、さらにHBV抗体血清検査、代替NAT、HBV DNA定量検査ならびに塩基配列決定の解析を行った。その結果、再検査率は、IDT 0.55%とMP4 0.33%であった。HIVまたはHCV陽性症例は認められなかったが、潜在的HBV陽性例は12名(IDT 9名、MP4 3名)であった。そのうちの11名は、genotypeがB2であることが判明した。そのうちの10名は、追跡調査のために再来院し、ほとんどが潜在的HBV感染症(OBI)であると判明した。IDTの陽性率 9/4210(0.21%)はMP4の3/6080(0.05%)と比べ高いことから、台湾のようにOBIキャリアが多い地域においては、より高感度のNAT法で検査を実施することが有益であると説明している。
5	B型肝炎	第46回日本肝臓学会総会; 2010 May 27-28; 山形	小児B型肝炎ウイルス(HBV)キャリア患者の感染経路・感染要因を解析し、現在のHBV感染予防対策の問題点について検討された。施設1では32例、施設2では133例、施設3では22例の合計187例のHBVキャリアにおいて、男女比は1.43:1、診断時年齢は中央値2歳(0ヶ月～15歳)であった。1985年までに出生していた症例は102例で、母児感染59例(57.8%)、父子感染6例(5.9%)、輸血5例(4.9%)、水平感染31例(30.4%)、不明1例で母児感染が過半数を占めていた。一方、母児感染予防処置が導入された1986年以降に出生した症例は85例で、母児感染51例(60%)、父子感染13例(15.3%)、輸血2例(2.4%)、水平感染19例(22.4%)であった。母児感染の割合は1985年までに出生していた症例と変化なく、父子感染は増加した。母児感染のうち胎内感染が16例、予防処置実施中あるいは実施後にHBV感染が判明した症例が22例で、現在の予防法で防ぐことができなかった症例が合計38例(74.5%)であったが、予防処置の不完全施行や未施行によるものが8例(15.7%)存在した。父子感染や水平感染の症例でHBワクチンの投与症例はいなかった。HBV母児感染予防処置導入後も小児のHBVキャリアは発生している。母児感染のうち約15%は予防処置の不完全施行や未施行が原因であり、医療者の啓発を行うとともに、予防処置プロトコルを簡略な国際方式にすることにより完遂率が高まると思われる。また、父子感染・輸血を含めた水平感染例も4割を占めており、諸外国のように日本でも出生後早期にHBユニバーサルワクチンが導入されることが望まれる。胎内感染例については出生後の予防処置では防ぐことができず、HBVキャリア妊婦へのHBIGや抗ウイルス剤投与などを行うべきか、今後検討していく必要があると説明している。

6	B型肝炎	第58回日本輸血・細胞治療学会総会; 2010 May 28-30; 愛知	2009年に全国の医療機関から報告された輸血関連感染症例(疑い例を含む)の解析結果と医療機関における「血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン」(以下GL)に基づいた輸血前後の患者検体の検査実施状況等について報告された。2009年に医療機関より報告された症例を対象とし、献血者検体(献血者の保管検体等の個別NAT、当該製剤(使用済みバッグ)等の無菌試験等)と患者検体の調査により輸血との因果関係を評価した。また、医療機関における患者の輸血前後の検査の実施項目等を2007、2008年時と比較した。その結果、10月末現在の報告数は82例(HBV 37例、HCV 21例、細菌 20例、パルボB19 2例、HEV 1例、CMV 1例)であり、輸血との因果関係が高いと評価した症例は、HBV 5例、HEV 1例、及び細菌 1例であった。医療機関でのGLに基づく輸血前後の患者検体の検査実施数(輸血前:HBs抗原/HBs抗体/HBc抗体、輸血後:HBV-DNA)はHBV症例で2007年6例(8%)、2008年12例(20%)、2009年9例(24%)であった。またHCV症例では(輸血前:HCV-RNA or HCVコア抗原/HCV抗体、輸血後:HCV-RNA or HCVコア抗原)2007年12例(29%)、2008年5例(12%)、2009年5例(24%)であった。細菌症例での医療機関における患者血培の実施数は、2007年27例(90%)、2008年43例(94%)、2009年20例(100%)であった。また、医療機関からの使用済みバッグの提供が2007年17例(57%)、2008年35例(76%)、2009年17例(85%)であった。以上よりGLが医療機関に浸透していることが推察された。
7	B型肝炎	第58回日本輸血・細胞治療学会総会; 2010 May 28-30; 愛知	スクリーニングNATのプール数の縮小効果について検討された。日本赤十字社では血液製剤等のHBV、HCV、HIVへの安全対策として1999年7月にプール検体(500本)によるスクリーニングNAT(AMP-NAT)を開始した。その後、プール検体数を50本、20本へと縮小し、2008年8月から検出感度向上を目的に新NATシステム(Taq-NAT)を導入した。2000年1月から2009年10月までの感染症報告症例のうち、輸血による感染を直接証明できた症例はHBV 91件、HCV 3件、HIV 1件であった。この原因となった輸血用血液の献血血液それぞれ 87献血、3献血、1献血を対象にし、当該献血時のスクリーニングNATをプール検体数別・試薬別に分類した。その結果HBV・HCV・HIV別に、50本プール前は8・0・0、50本プール/AMP-NAT(2000年2月-2004年7月:4.5年間)は46・2・1、20本プール/AMP-NAT(2004年8月-2008年7月:4年間)は30・1・0、20本プール/Taq-NAT(2008年8月-2009年10月:1.25年間)は3・0・0であった。ウイルス増殖スピードの遅いHBVについて、プール検体数の縮小・試薬の検出感度向上により、輸血感染HBVの減少傾向が認められた。一方、ウイルス増殖スピードの速いHCV、HIVはスクリーニングNAT導入後約10年が経過した中で輸血感染HCVが3件、輸血感染HIVが1件と、NATの導入自体に効果があったことが推測された。2008年8月から導入された新NATシステムにより、更なる安全性向上に努めているところである。
8	E型肝炎	J Clin Virol.2010;48:58-61	インドにおいてヒトE型肝炎ウイルスブタ由来遺伝子4型(HEVG4)感染が認められた初症例について報告された。患者は黄疸、進行性脳障害を発症しており、重度の関節リウマチ、2型糖尿病、高血圧にて複数の薬剤が長期投与されていた。患者は黄疸発現の1カ月前にインドに2カ月間滞在していた。初期検査から黄疸と診断され、RT-PCR検査にてHEV陽性が判明した。その後、抗HEVIgM及び抗HEVIgGが陽性であることが判明した。診断から4週間後、HEVが9320ge/mLに低下した。患者は恐らくインド滞在中に加熱調理不十分の豚肉からHEVG4に感染し、重篤な肝炎を発症したと考えられた。
9	E型肝炎	J Infect Dis. 2010 Jul 15;202(6):825-834	ヒトへのE型肝炎ウイルス感染原因として、フランスで伝統的に生食されているフィガテルというブタ肝臓ソーセージについて調査された。3人のE型肝炎患者と彼らの3家族15人のケースコントロール研究が実施された。抗HEV免疫グロブリンGとM抗体を測定し、患者の血清試料とブタ肝臓ソーセージのHEV RNAをリアルタイムPCR法により検出し、その塩基配列を同定し、遺伝学的関連が検討された。その結果、急性あるいは最近のHEV感染(抗HEV免疫グロブリンM抗体やHEV RNAの存在により規定)は、生フィガテルを食した人では7/13人で、生フィガテルを食さなかった人では0/5人で観察された。HEV RNA遺伝子型3が、スーパーマーケットで購入可能な12のフィガテルのうち7フィガテルにおいて検出された。これらフィガテル由来のHEV RNA塩基配列は生フィガテルを食した患者由来の塩基配列と統計学的に有意な遺伝的関連が認められた。当該結果から、生フィガテル摂取によるHEV感染の仮説が強く支持されたと説明している。
10	E型肝炎	Journal of Medical Virology 2010;82(1):69-76	感染動態を調査するために、HEVIに自然感染した2匹の国産妊娠ブタの各同産仔(A群及びB群)を生後6か月まで研究した。母子移行IgG及びIgA抗体はA群から検出されたが、B群からは検出されなかった。生後30-110日において、全群の糞便からHEVが検出され、17匹については、生後40-100日にウイルス血症が出現した。系統発生分析によって、全群にHEV遺伝子型3に非常に近い塩基配列であることが示された。特異的なIgG及びIgAの血清レベルは、IgAが糞便で検出されなかったが、全群で同様であった。ウイルス血症と抗体陽転の開始は、A群で有意に遅れていた。糞便に排出されたウイルスの動態は両群で同様であった。感染動態の違いから、母性抗体がウイルス血症と抗体陽転開始を遅延させることが示唆された。定量的リアルタイムPCR解析の結果、糞便中のHEV RNAは約 10^6 copies/gであり、最初の排泄から10日後にHEV RNAのコピー数はピークに達することが明らかとなった。生後200日で、HEV RNAは13匹中3匹の内臓から検出された。ブタでのHEV自然感染について時間的経過を追った当該研究結果は、ブタからヒトへ感染する際のHEVの動態を理解するのに役立つであろう。

11	E型肝炎	第51回日本臨床ウイルス学会2010年6月19-20日	E型肝炎は、開発国においては輸入感染症や食中毒の原因として問題となっており、ブタなどの動物を宿主とする人獣共通感染症である。タイ国チェンマイ近郊の農場で2004年から2008年までに飼育されていた生後4週から28週までのブタから採取された血清(375本)中のE型肝炎ウイルス(HEV)の感染状態をIgG抗体の検出により調べた。その結果、週齢に相関して陽性率および抗体価は上昇していた。なお、すべての血清において、ウイルスRNAは検出されなかった。以上より、本農場で飼育されているブタにおいて、HEVが蔓延しており、生後5か月では半数が感染し、ほとんどの成熟ブタが感染歴を持つと考えられた。
12	レトロウイルス(XMRV)	AABB Association Bulletin #10-03	2010年6月18日、AABBはAssociation BulletinにCFS(Chronic Fatigue Syndrome)と供血に関する広報を発表した。AABBのBoard of Directorは、XMRV(Xenotropic Murine Leukemia Virus-Related Virus)に関するAABB Task Forceが奨める暫定措置を承認した。内容は、現在もしくは過去にCFSと診断された患者が、血液もしくは血液成分の供血をしないようにするもので、Task Forceは、供血時に活用される供血者情報資料の使用を介し、供血血液からCFSと診断された可能性のある供血者を、積極的に思いとどまらせるよう推奨した。
13	レトロウイルス(XMRV)	ABC Newsletter #15.2010 Apr 23;15	ニュージーランドの血液バンクでは慢性疲労症候群(CFS)の既往を持つ供血者の供血延期を開始し、オーストラリア当局は、供血ガイドラインの見直しを行っている。ニュージーランドの決定は、前立腺癌と関連性があるXMRVが、健康集団と比較してCFS患者の血中に非常に多く認められたという調査を受けてなされた。他の科学者は、この結果を確認することができなかったが、米国保健当局は、CFSとXMRV間の関連の可能性について調査を行っており、カナダ血液サービスはすでにCFSの診断を受けた供血者からの供血を無期限延期としている。一方、オーストラリア赤十字血液サービスは、独自にリスク分析を行い、完全に回復するまでのCFS患者からの供血を延期することを現行のガイドラインで求めている。
14	レトロウイルス(XMRV)	www.fda.gov/News/Events/Newsroom/PressAnnouncements/ucm223277.html	米国食品医薬品局生物製剤評価・研究センター及び米国国立衛生研究所臨床センターの研究者は、慢性疲労症候群(CFS)と診断された患者37例と健康血液ドナー44例由来の血液試料において、CFS患者由来の32例(87%)及び健康血液ドナー由来の3例(7%)に複数の異なるマウス白血ウイルス(MLV)遺伝子配列を同定した。当該研究はMLV様ウイルスの遺伝的変異体であるXMRVがCFS患者の血液中に存在するとの過去の研究報告を支持し、CFSの診断と血液中のMLV様ウイルス遺伝子配列の存在との間に強い関連性があることを示している。さらにごく一部の健康血液ドナーにおいてMLV様ウイルス遺伝子配列が検出されている。CFSとの統計的な関連は強いものの、当該研究でレトロウイルスがCFSの原因であることが証明されたわけではない。
15	インフルエンザ	CDC/MMWR 59(29); 901-908 2010 July 30	米国における2009年から2010年シーズン(2009年8月30日～2010年6月12日)のインフルエンザウイルスに関する情報が更新された。当該シーズンに2009年パンデミックインフルエンザAウイルス(H1N1)による第2の流行が発生した。インフルエンザの活動性は2009年10月後半にピークとなり、これまでのシーズンに比して小児及び若年成人に高い死亡率及び入院率が認められた。H1N1ウイルス感染に加えて、新規インフルエンザAウイルス感染例3例が同定された。3例から北米豚系列インフルエンザA(H3N2)が各Kansas,Iowa及びMinnesotaから分離された。Minnesotaの症例は、症状発症前に畜産市場に訪れており、Kansasの症例は症状発症の週にブタと接触していたことが報告されている。
16	新型インフルエンザ(H1N1)	CDC FluView 2009-2010 Influenza Season Week 20 ending May 22, 2010	2009-2010における最後の報告である。米国CDCは、Week 20(2010年5月16-22日)における米国内インフルエンザ活動が沈静した事を報告した。検査の結果、インフルエンザ部門に報告された検体2(0.2%)がインフルエンザ陽性であり、いずれも2009インフルエンザA(H1N1)ウイルスであった。また、肺炎およびインフルエンザに起因する死亡の割合はepidemic thresholdを下回り、インフルエンザに関連した小児の死亡3例は2009インフルエンザA(H1N1)ウイルス感染に関連していた。インフルエンザ様症状で来院した患者の割合は1.0%であり、全国基準の2.3%を下回り、調査対象である10の全地域についても地域の基準を下回った報告であった。
17	新型インフルエンザ(H1N1)	ProMED-mail 20100630.2177	インドでは、豚インフルエンザウイルスによる死亡者がモンスーン到来から増え続け、2010年6月21日から17例の死亡者が報告され、Kerala州とMaharashtra州において各7例が報告された。今週報告された345例は全て先住民族の症例であった。現在までに143,285例に対しインフルエンザウイルスH1N1の検査が実施され、33,083例(23%)が陽性であった。Kerala州の死亡者はモンスーン到来から32例となっている。
18	新型インフルエンザ(H1N1)	www.ijii.com/ic/zc/?k=201006/2010061800115	2009年登場した新型インフルエンザウイルスが豚に感染してさらに変異していることを、香港大などの研究チームが確認し、米科学誌サイエンスに発表した。2009年6月から2010年2月の間に香港の豚から検出された32種類のインフルエンザウイルスの遺伝子を系統的に解析した結果、10種が新型、6種が従来の豚インフルエンザウイルスだった。残り16種類は遺伝子が組み換わったタイプで、このうち2010年1月に見つかったものは新型の遺伝子を持っていた。感染した豚には軽い症状が出た。豚には、致死率が高い高病原性のH5N1型鳥インフルエンザウイルスが感染した例もある。今回の新型は比較的病原性が低いが、豚の体内で遺伝子が組み換わり、有害なウイルスになる可能性があるとしている。

19	鳥インフルエンザ	Journal of Virology 84(2); 940-952 2010 January	水鳥から国内家禽に伝播したインフルエンザAウイルスからは、NA(neuraminidase)のstalk領域が約20aa欠損した株が多く検出されることから、野生カモからウイルス株MZ(野生株)を分離し、また、stalk領域に欠損のあるMZ-delNAが作製された。MZ-delNAはMZより、トリ培養細胞でゆるやかな増殖促進を示し、また、MZ-delNAウイルスを接種されたニワトリは、MZ接種より特定臓器でのウイルス複製が増幅し間質性肺疾患が重篤化していた。また、MZ-delNAウイルスの増殖促進を引き起こす可能性のある分子メカニズムが調べられた。NA stalkの欠損は、子孫ウイルス粒子の放出を促進するのではなく、恐らく、ウイルスサイクルの初期段階に影響を及ぼすことが示唆され、NA stalk短縮化はニワトリにおける水鳥インフルエンザウイルスの適応および病原性の重大な決定因子である事が示唆された。
20	鳥インフルエンザ	Journal of Virology 84(7); 3718-3720 2010 April	高病原性トリインフルエンザH5N1ウイルスの仲介宿主としてのスズメの関与を明らかにするため、スズメおよびニワトリにおけるA/duck/Laos/25/06のウイルス排泄および水系伝播を評価した。接種されたトリは中咽頭および排泄腔から高タイトーのウイルスを排泄し、感染は致死性であった。接種されたスズメからのニワトリへの水系感染はなかったが、25%のスズメはニワトリから水系感染した。養鶏舎で居合わせたスズメに認められたウイルス排泄および感染への感受性は、(H5N1インフルエンザウイルスのアウトブレイクに直面している)家禽および野鳥間でのウイルスの広がりを促進している可能性がある。
21	ウエストナイルウイルス	CDC/MMWR 2010 July 2	2009年の米国におけるウエストナイルウイルス(WNV)の流行状況について、米国疾病管理予防センター(CDC)が発表した。米国の38州の262郡と、コロンビア特別区から720症例のWNV感染症が報告された。そのうち386例(54%)が神経侵襲性疾患で、334例(46%)が非神経侵襲性疾患であった。WNV感染症での死亡者は全部で33人が報告され、そのうち32人が神経侵襲性疾患であった。神経侵襲性疾患のうち229例(59%)が脳炎、117例(30%)が髄膜炎、40例(10%)が急性弛緩性麻痺であった。急性弛緩性麻痺40例のうち、27例(68%)が脳炎または髄膜炎を併発した。WNVによる疾病を制御する上で、調査の継続、蚊の管理、蚊に対する防御用具、及び更に予防戦略を検討することが必要である。
22	ウエストナイルウイルス	Department of Epidemiological Surveillance and intervention 13 Aug.2010	ギリシャ疾病制御センターは2010年8月12日時点で、中枢神経症状を有するウエストナイルウイルス感染症例が34例(死亡2症例を含む)と報告した。中枢神経症状は主に脳炎と髄膜炎の両方または何れか一方であった。
23	ウエストナイルウイルス	Emerging Infectious Disease 16:573-575 March 2010	南アフリカGauteng産の4か月齢のウマに発熱、Schiff-Sherrington症状及び白血球異常が認められた。初発症状から約1カ月後、神経機能低下及び直腸脱を伴い再度発症し、更に容態が悪化したため、安楽死させられた。屠殺翌日、獣医大にて剖検が実施され、検体からWNVが検出された。DNA塩基配列解析及び系統樹解析によって、WNV lineage2に分類された。剖検から6日後、剖検時に脳を扱った獣医学生において発熱、倦怠感、筋肉痛、頸部硬直及び重度の頭痛が発現し、その2日後には発疹も発現し、10日間、症状は継続した。患者血清、患者由来ウイルスを培養する目的で用いたマウス及び屠殺されたウマの脳から分離された各WNVのNS-5タンパクの遺伝子断片を用いて、系統樹解析を行った結果、lineage2に分類される非常に近交した遺伝子であることが判明した。この結果は、神経症状を呈したウマの剖検時に、WNVがウマからヒトに感染した可能性を示している。尚、同剖検時において、患者以外にWNVの曝露を受けた者はいない。患者は、剖検時に目及び呼吸器系を保護していなかったことから、粘膜がウイルスを含有する飛沫に曝露されたため、WNVが伝播した可能性が高いと考えられている。
24	日本脳炎	第51回日本臨床ウイルス学会2010年 6月19-20日	感染症流行予測調査により得られた国民の抗体保有状況及びブタの抗体保有状況について、ヒトでは11都府県の約2,500人及びブタでは36都府県の約5,000頭を対象(2009年度)とし、それぞれ日本脳炎ウイルス(JEV)に対する中和抗体価(NT価)及び赤血球凝集抑制抗体価(HI価)が測定された。ヒト年齢別抗体保有率(NT価1:10以上)は、1~2歳(10%未満)、8~20歳代前半(70~80%)、20歳代後半(漸減)、50歳代前半(20%未満)であり、ブタ地域別抗体保有率(NT価1:10以上)は、関東以西22県(50%超)であった。定期予防接種第1期の標準接種年齢(3~4歳)の抗体保有率は、2005年5月の「定期の予防接種における日本脳炎ワクチン接種の積極的勧奨の差し替えについて」の勧告以降、漸減し、2009年度の3~7歳は34%であり、2004年度の同年齢層(72%)に比して低かった。
25	ハンタウイルス	ProMED-mail 20100304.0711	ロシア公衆衛生医は、HFRS(hemorrhagic fever with renal syndrome)の発生が、平年のこの時期の90倍に達していると警告した。2009年11月から2010年1月までのAshinsky地域では60症例が報告され、2008年の同地域における症例の3倍である。
26	狂犬病	ProMED-mail 20100820.2906	狂犬病陽性動物について、米国Virginiaで3報(アライグマ、ウシ)、Idahoで2報(コウモリ)、South Carolinaで1報(キツネ、イヌ)、Montanaで2報(コウモリ、ネコ、イヌ)、Floridaで1報(アライグマ)が報告された。感染動物からヒトへの曝露は、アライグマ感染例以外で認められている。
27	デング熱	Asia One Health, The Brunei Times/Asia News Network 2010年4 月29日	2010年1月から4月の第1週において、ブルネイでは77例(Brunei-Muara地区67例、Kuala Belait5例、Tutong4例、Temburong1例)がデング熱に罹患した。この数は、2009年の1年間に報告された37症例を上回っている。主な原因として、不十分な下水管理のために汚染された水たまりであると考えている。

28	デング熱	IRIN (2010 Jun 8)	スリランカにおいてデング熱のアウトブレイクに対するリスク対策強化について報告された。2009年全国でデング熱症例35007例(死亡346例)は、2008年症例6555例に比して430%以上の増加であると報告された。35007例のうち6月に最高症例数7048例、7月は6872例であった。2010年1月に報告された症例数は4674例であり、2009年同時期(2009年1月)の1279例に比して3.7倍の増加である。リスク要因として6月、7月のモンスーンによる絶え間ない激しい降雨を挙げている。
29	デング熱	ProMED-mail 20091228.4371[4]	メキシコ南部ではデング熱症例数が増加し、4州(Tabasco, Veracruz, Yucatan, Campeche)で非常警告(red alert)を宣言する政府レベルとなり、市町村およびコミュニティで防御措置が強化された。国家的状況(National context)では、これら4州を含む南部の州では105,000例の可能性のある症例および55,000確定例が登録されている。
30	デング熱	ProMED-mail 20100104.0038[2]	ブラジルMato Grossoでは2009年の間、デング熱による死亡55例(うち50例は検査により確定)が報告されている。2009年12月29日現在、デング熱54,299症例が報告され、このうち1474例は重症例である。Mato Grosso州では、2009年1月から12月22日までと2008年同時期とを比較してデング熱症例報告は374%増加であった。
31	デング熱	ProMED-mail 20100119.0211[1]	マレーシアSarawakでは2009年-2010年1月2日の間、州の多くのヒトがデング熱に罹患した。政府の発表によると、この期間にデング熱症例4579例が報告され、2008年には1527例であった。
32	デング熱	ProMED-mail 20100125.0277[5]	イエメンでは、1994年以降、奇妙な(strange and quiet)蚊がTaizで増殖しており、この蚊がヒトを介してデング熱を伝播している。病気はTaizで確立されており、危険が増しているという事実があるにも関わらず、問題のある死体の放置の中で町は悩まされている。問題の死体が1994年初期に対応されていたら、状況はもっと良かったであろう。感染症例は100,000例を超え、感染した50例は死亡し、7人の医師が感染し、うち1名は死亡した。デング熱を広げる蚊の住む環境を撲滅する対応策は2つに分けられ、第1は水不足の解消に関係し、第2は病気の危険性および防御する方法に加え、病気を拡散させる蚊を除去するために町を清掃することである。デング熱は、2007年には220例、2008年では360確定例、2009年には906例に達した。
33	デング熱	ProMED-mail 20100607.1903	デング熱に関する情報が更新された。①イタリアにおいて、2症例が報告され、エジプトの紅海に渡航歴のある症例であった。②Gabonにおいて、Haut-OgooueとOgooue-Lolo州のチクングンヤ熱やデング熱の登録症例616例のうち、84例がデング熱、15例が両ウイルスに同時感染していた。③インド(Maharashtra)において、デング熱症例は2009年は679例、2010年5月までに34例が集積している。④米国(Virgin Islands)において、2010年6月2日にデング熱の最初の1症例が報告された。⑤Guadeloupeにおいて、2010年5月17日-23日、新たなデング熱の症例が650例。2009年12月1週目から計7260症例の集積である。⑥ブラジル(Rio Grande do Sul)において、デング熱に対する対策を強化。⑦ブラジル(Sao Paulo)において、2001年~2009年のデング熱症例は16553症例、2010年~現在で24523症例が認められており、2010年1月~2010年6月2日までの症例数は過去10年の総数より48%増加している。⑧ブラジル(Rio de Janeiro)において、2010年5月26日までにRio de Janeiroでデング熱にて死亡例17例、Sao Goncaloでは死亡例6例が報告された。2010年5月までにデング熱は13154例であり、2009年の同期間では9566例が報告されている。⑩ブラジルではデング熱は15歳以下の若い年齢層に増加している。
34	灰白髄炎	ProMED-mail 20100	ロシアにおけるポリオの報告。ロシアのUrals Chelyabinskにおいて、小児2例(8歳、17歳)がポリオと診断された。2症例は医療機関にて治療を受けていたが、17歳の症例はTajikistanに戻り、8歳の症例は未だ医療機関で治療を受けている。ポリオの状況はTajikistanとロシアで悪化し続けており、500症例以上のポリオ患者がTajikistanに登録されている。現在のところ、15症例が死亡している。
35	灰白髄炎	www.who.int/csr/don/2010_07_23/en/index.html	2010年1月1日から、タジキスタンにおいて、野生型ポリオウイルス1型のタジキスタンへの渡来に続いて、ポリオ症例430例、うち19例が死亡したと報告された。7例はウイルス学的にロシアで検出された症例に関連していた。
36	口蹄疫	OIE 2010 March 18	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年3月12日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年3月4日にGUANGDONGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ1,108頭、確定例はブタ69頭、死亡例0頭、屠殺1,108頭であった。
37	口蹄疫	OIE 2010 April 1	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年3月3日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年3月14日にGANSUで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ1,096頭、確定例はブタ206頭、死亡例7頭、屠殺1,089頭であった。
38	口蹄疫	OIE 2010 April 8	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年4月8日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年3月28日にGUANGDONGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。飼育頭数はブタ3,479頭、確定例はブタ223頭、死亡例0頭、屠殺3,479頭であった。

39	口蹄疫	OIE 2010 April 9	中国における口蹄疫:発生日2010年2月22日、最初の確定日2010年2月28日、報告日2010年4月8日、原因、口蹄疫ウイルスO型。2010年3月28日にJingye、Guangzhouの農場にて、ブタ確定223頭、疑い例3479頭、死亡例0頭、屠殺例3479頭。
40	口蹄疫	OIE 2010 April 15	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年4月12日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年4月7日にGANSUで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、飼育頭数は831頭、確定例は640頭、死亡例0頭、屠殺831頭であった。ヒツジ/ヤギについて、飼育頭数は389頭、確定例は58頭、死亡例0頭、屠殺389頭であった。
41	口蹄疫	OIE 2010 April 20	韓国における口蹄疫(追跡調査No.1):発生日 2010年4月8日、最初の確定日 2010年4月9日、報告日 2010年4月19日、原因 口蹄疫ウイルスO型。2010年4月9日もしくは10日に、INCH'ON-JIKHALSIで口蹄疫のアウトブレイクが4件発生した。飼育頭数は総数で畜牛354頭・ブタ1500頭、確定例は総数で畜牛11頭・ブタ3頭、死亡例はいずれも0頭、屠殺例は総数で畜牛354頭・ブタ1500頭であった。
42	口蹄疫	OIE 2010 April 20	韓国における口蹄疫:発生日2010年4月8日、最初の確定日2010年4月9日、報告日2010年4月19日、原因、口蹄疫ウイルスO型。2010年4月9日から4件のアウトブレイクが発生した。アウトブレイクNo.1:開始日2010年4月10日、Sunwon-myeon、Ganghwa-gun、INCH'ON-JIKHALSIの農場にて、ウシ確定4頭、疑い例220頭、死亡例0頭、屠殺例220頭。アウトブレイクNo.2:開始日2010年4月9日、Sunwon-myeon、Ganghwa-gun、INCH'ON-JIKHALSIの農場にて、ウシ確定6頭、疑い例90頭、死亡例0頭、屠殺例90頭。アウトブレイクNo.3:開始日2010年4月9日、Sunwon-myeon、Ganghwa-gun、INCH'ON-JIKHALSIの農場にて、ウシ確定1頭、疑い例44頭、死亡例0頭、屠殺例44頭。アウトブレイクNo.4:開始日2010年4月9日、Buleun-myeon、Ganghwa-gun、INCH'ON-JIKHALSIの農場にて、ブタ確定3頭、疑い例1500頭、死亡例0頭、屠殺例1500頭。
43	口蹄疫	OIE 2010 April 21	中国における口蹄疫:発生日2010年2月22日、最初の確定日2010年2月28日、報告日2010年4月21日、原因、口蹄疫ウイルスO型。2010年4月17日にGansu、Tianshui、Wushan、Tianfengの農場において口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタ確定例47頭、疑い例403頭、死亡例0頭、屠殺例403頭
44	口蹄疫	OIE 2010 April 22	宮崎県児湯郡、都農町の農場において、ウシ口蹄疫のアウトブレイクが発現した。開始日は2010年4月17日
45	口蹄疫	OIE 2010 April 22	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年4月21日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年4月17日にGANSUで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、疑いがあるのは403頭、確定例は47頭、死亡例0頭、屠殺403頭であった。
46	口蹄疫	OIE 2010 April 29	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年4月23日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年4月13日にGUIZHOUで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ウシについて、疑いがあるのは73頭、確定例は47頭、屠殺は73頭であり、ブタについては、疑いがあるのは41頭、確定例は25頭、死亡例2頭、屠殺39頭であった。
47	口蹄疫	OIE 2010 April 30	中国における口蹄疫ウイルス:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年2月28日、原因 口蹄疫ウイルスO型。2010年4月23日にNINGXIAで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。疑い例はブタ778頭、確定例はブタ152頭、死亡例1頭、屠殺例はブタ777頭であった。
48	口蹄疫	OIE 2010 May 5	日本における口蹄疫ウイルス:発生日 2010年3月26日、最初の確定日 2010年4月20日、報告日 2010年5月5日、原因 口蹄疫ウイルスO型。2010年4月28日-5月4日に宮崎県で総計13の口蹄疫アウトブレイクが発生した。全アウトブレイクを通し、疑い例はブタ30580頭・畜牛515頭、確定例はブタ25頭・畜牛9頭、屠殺例はブタ30580頭・畜牛515頭であり、死亡例はなかった。
49	口蹄疫	OIE 2010 May 6	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年4月30日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年4月23日にNINGXIAで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、疑いがあるのは778頭、確定例は152頭、死亡例1頭、屠殺777頭であった。
50	口蹄疫	OIE 2010 May 6	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年5月2日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年4月20日にXINJIANGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、疑いがあるのは771頭、確定例は771頭、死亡例15頭、屠殺756頭であった。
51	口蹄疫	OIE 2010 May 19	日本(宮崎)における口蹄疫:発生日2010年3月26日、最初の確定日2010年4月20日、報告日2010年5月19日、原因、口蹄疫ウイルスO型。川南町などの農場において、ブタ確定例31頭、疑い例36083頭、屠殺例36083頭。

52	口蹄疫	OIE 2010 June 3	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年5月31日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年5月17日にTIBETで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、疑いがあるのは701頭、確定例は12頭、死亡例0頭、屠殺701頭であった。
53	口蹄疫	OIE 2010 June 24	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年6月21日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年6月10日にXINJIANGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、疑いがあるのは1,280頭、確定例は83頭、死亡例0頭、屠殺1,280頭であった。
54	口蹄疫	OIE 2010 July 1	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年6月28日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年6月19日にXINJIANGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ブタについて、疑いがあるのは355頭、確定例は24頭、死亡例0頭、屠殺355頭であった。
55	口蹄疫	OIE 2010 August 5	中国における口蹄疫:発生日 2010年2月22日、最初の確定日 2010年2月28日、報告日 2010年8月2日、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年7月27日にGANSUで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。ウシについて、疑いがあるのは32頭、確定例は0頭、死亡例0頭、屠殺32頭であり、ヒツジ/ヤギについて、疑いがあるのは248頭、確定例は0頭、死亡例0頭、屠殺248頭、ブタについて疑いがあるのは184頭、確定例は28頭、死亡例0頭、屠殺184頭であった。
56	口蹄疫	ProMED-mail 20100330.0997	中国における口蹄疫、原因 口蹄疫ウイルス O型。2010年3月14日にGUANGDONGで口蹄疫のアウトブレイクが発生した。飼育頭数のうち罹患例はブタ206頭、死亡例7頭、屠殺1,089頭であった。
57	口蹄疫	ProMED-mail 20100411.1174	中国における口蹄疫。四川省、河南省及びその他大規模に養豚を行っている省を含む広領域で口蹄疫のアウトブレイクが発生した。原因は口蹄疫ウイルス O型と予測されている。
58	口蹄疫	ProMED-mail 20100413.1197	中国における口蹄疫。GANSUで698頭(ブタ640頭、ヒツジ58頭)において口蹄疫と疑われる症状が発現した。その後、口蹄疫ウイルス O型が確認された。当該地区の病畜1,120頭及び同群れのブタ831頭、ヒツジ398頭は屠殺された。
59	口蹄疫	ProMED-mail 20100618.2041	カザフスタンにおける口蹄疫について報告された。開始日2010年6月9日、最初の確定日2010年6月15日、血清型は不明。Novodolinka、Erymentaum、Aqmola、Kokchetavにおいて、ウシ:確定例140頭、疑い例639頭、死亡例0頭、屠殺例639頭、ヒツジ-山羊:確定例0頭、疑い例767頭、死亡例0頭、屠殺例0頭、ブタ:確定例0頭、疑い例487頭、死亡例0頭、屠殺例487頭。
60	口蹄疫	ProMED-mail 20100629.2166	Xinjiangウイグル自治区及びQinghai省において、新たな口蹄疫感染症例が確認された。2010年6月19日、Xinjiang自治区Aksu市西部郊外のブタ24頭に口蹄疫ウイルスO型が同定され、また2010年6月26日、Qinghai省では、ブタ17頭に同ウイルスが同定された。両地域の感染ブタ508頭が屠殺された。
61	口蹄疫	農林水産省消費・安全局 事務連絡 平成22年4月9日	韓国において口蹄疫(O型)が発生し、平成22年4月9日に診断がなされたが、同国では1月にも口蹄疫(A型)が発生し、3月23日に終息宣言をしたところであった。韓国における防疫措置は、発生農場の牛180頭および半径500m以内で飼育されている家畜の殺処分 および危険区域・サーベイランス区域・制限区域の3区域内での移動制限の実施等である。日本においては、動物検疫所における、韓国からの偶蹄類等の輸入禁止・旅客の靴底消毒の徹底である。
62	口蹄疫	農林水産省 プレスリリース 平成22年4月23日	農林水産省より宮崎県における口蹄疫の確定診断についてプレリリースが発表された。2010年4月20日、宮崎県児湯郡都農町で発生した1例目の疑似患畜につき、(独)農研機構動物衛生研究所において抗原検出検査(ELISA検査)の結果、口蹄疫(O型)と確定した。発生農場では4月20日以降、殺処分、移動制限区域(半径10km)および搬出制限区域(半径20km)の設定等防疫措置を講じており、今後も継続される。
63	パルボウイルス	2009 ASH Annual Meeting Abstracts 114(22) Abstract 3152 (2009 November 22)	B19V(parvovirus B19)は通常、呼吸器系ルートを通じて拡散するが、非経口感染は血液・血液成分および血漿分画製剤を介して感染することがある。B19に関して血漿分画製剤の安全性を確認するために、通常B19Vモデルウイルスとして動物のパルボウイルスを使用してウイルスバリデーション試験を実施するが、このウイルスは一般に加熱などの不活化に強い抵抗性を有している。CSLベーリングのウイルス研究所で開発されたB19V細胞培養感受性試験により、B19は動物パルボウイルスCPVと比較してpasteurization(液体中で60℃10時間加熱処理)に比較的高い感受性を示すことが分かった。

64	パルボウイルス	Blood 114(22):1224	B19V(parvovirus B19)は通常、呼吸器系ルートを経して拡散するが、非経口感染は血液・血液成分および血漿分画製剤を介して感染することがある。B19に関して血漿分画製剤の安全性を確認するために、通常B19Vモデルウイルスとして動物のパルボウイルスを使用してウイルスバリデーション試験を実施するが、このウイルスは一般に加熱などの不活化に強い抵抗性を有している。CSLベーリングのウイルス研究所で開発されたB19V細胞培養感受性試験により、B19は動物パルボウイルスCPVと比較してpasteurization(液体中で60°C10時間加熱処理)に比較的高い感受性を示すことが分かった。
65	パルボウイルス	Journal of General Virology 2010;91(2):541-544	パルボウイルスPARV4は、ヒト宿主のパルボウイルス科の種類として最近報告されたウイルスである。B型肝炎、C型肝炎あるいはHIV感染患者等の様々な集団由来の血漿、血清及び全血を用いて、定量PCR法により血中のPARV4の検出率が検討された。その結果、8検体がPARV4陽性であり、うち1検体は高コピー数を示した。高力価の血清は約5×10 ⁸ genome equivalents/mLであった。間接免疫蛍光法によって、PARV4抗体陽性が同定された2患者の血清を用いて、血清中の天然(native)PARV4を免疫電子顕微鏡下で可視化したところ、1患者由来の血清においてPARV4粒子が観察された。天然(native)のPARV4の可視化は、初めてのことである。
66	パルボウイルス	XXXIst International Congress of the ISBT;2010 Jun 26- July 1; Berlin,Germany	ヒトパルボウイルスB19(B19)DNA陽性血液製剤の感染性について検討された。2000年以降、ドイツのウルム研究所では、供血6~8週間後(血液製剤供給後)について、B19に対する供血者NATスクリーニングを実施している。レトロスペクティブな研究において、受血者を次の2群に分け(A群:B19ウイルス量≤10 ³ IU/mLの血液製剤受血者、B群:B19ウイルス量>10 ³ IU/mLの血液製剤受血者)VP-1uゲノム領域の系統発生解析をB19DNA陽性供血者と受血者に対して行い、全ての試料に対して、IgM、IgG抗体を調べた。その結果、B19 DNAはB群の赤血球濃厚液受血者18名中9名に検出されたが、A群の受血者16名にはB19 DNAは検出されなかった。系統発生解析では、供血者と受血者間で同一ゲノム配列を示した。血液製剤によるB19伝播は、ウイルス濃度と中和抗体価に相関することが示唆されると説明している。
67	ウイルス感染	Emerging Infectious Diseases 2010; 16(5): 856-858 May 2010	2009年8月にテキサス州ダラスで採取した、ヒトスジシマカにおけるLa Crosseウイルス(LACV)について報告された。LACVは主にAedes triseriatusが媒介する、北アメリカでの小児脳炎の主要な原因である。しかし近年、LACV脳炎が南東部地域で増加し、南部でも報告されている。同時にアジアからの外来種であるヒトスジシマカが増加しているが、今までヒトスジシマカとLACV伝播の関連は不明であった。今回の調査で、テキサス州ダラスで採取したヒトスジシマカからLACVが検出され、これまで流行が確認されていた範囲外で、外来性の蚊に当該ウイルスが認められた。
68	ウイルス感染	J Virol 84(12) 6033-6040 2010	8種類の弱毒性ウイルスワクチン(3価経口ポリオウイルス(OPV)、風疹、麻疹、黄熱、水痘带状疱疹、MMR、ロタウイルス生ワクチン2種類)を対象にメタゲノミクスによって、ウイルス核酸を部分的に精製し、増幅、及び塩基配列を解析した。弱毒化に影響を及ぼすことが知られていない突然変異及び少数変異がOPV、ムンプスウイルス、水痘带状疱疹ウイルスで検出された。これまでにヒトへの非感染性が示されているトリ白血病ウイルス(ALV)が、ウイルス粒子内にRNAとして存在していた。またサルレトロウイルス(SRV)が遺伝学的に不完全なDNAとして存在していた。経口投与されるロタウイルスワクチン(Rotarix)にブタサーコウイルス1型(PCV1)が含まれていた。PCV1は広く蔓延している非病原性のブタのウイルスであり、ヒトへの感染性は示されていない。汎微生物マイクロアレイでのワクチン核酸ハイブリダイゼーションによって、内在性レトロウイルス核酸及びPCV1核酸の存在を確認した。
69	ウイルス感染	ProMED-mail 20100428.1376	カザフスタンにおけるクリミア・コンゴ出血熱(CCHF)の報告。2010年4月20日時点、南カザフスタンOblastにおいて、7症例のCCHF症例のうち、2症例が死亡した。これら7症例と接触した127人については、現在医学的監視下にある。
70	ウイルス感染	ProMED-mail 20100629.2161	アフガニスタンにおけるクリミア・コンゴ出血熱(CCHF)の報告。アフガニスタンHelmand州においてCCHFのウイルス感染症例が7例確認された。隣接するアフガニスタンの国境地域におけるアウトブレイクを受けて、パキスタン保健当局はKhyber PakhtunkhwaおよびFATA保健当局に警告した。
71	ウイルス感染	ProMED-mail 20100718.2406	ロシアにおけるクリミア・コンゴ出血熱(CCHF)の報告。StavropolにおいてCCHFの流行が続いており、2010年の累積症例数はこれまでに25例である。第1症例は素手でウシからダニを捕り、つぶしたという症例である。Stavropol oblastの11地域でCCHF症例が登録されており、ほとんどの症例がIpatovski及びNeftekumskiの地域であった。調査からダニのわずか5%がCCHFウイルスのキャリアであるが、この頻度は2009年の記録よりも顕著に高くなっていることが示された。2010年のCCHF症例6例について(重篤1例を含む)、3症例はPrivoljskoe地域で登録され、うち1症例は致命的な症例であった。残りの3症例は各1例がAstrakhan、Narimanovskoe及びChernoyarskoe地域で登録された。ダニは昨年比して今年は約1.3倍の発生と推定されている。1000人以上がダニに噛まれ受診している。
72	ウイルス感染	uk.reuters.com/article/idUKTRE67U4RH20100831	痘瘡ワクチンはサル痘ウイルスに対して有効されているが、新たな研究結果によると、サル痘感染が痘瘡根絶の勝利宣言直後に比べ、現在少なくとも患者数は20倍に増えている。

73	ウイルス感染	Vietnam Net Bridge 2010/5/26	ベトナムQuangNgai省の中部で、豚繁殖・呼吸障害症候群(PRRS、通称:青耳病)ウイルスに感染したと疑われる男性が死亡した。今年の4月以降、陽性例が4例検出されている。
74	ウイルス感染(リフトバレー熱)	ProMED-mail 20100513.1557	2010年5月10日の時点で南アフリカ保健省は、18人の死者を含む186人のリフトバレー熱(RVF)症例を報告している。主要な感染経路は、感染した家畜の血液や組織に触れることであるが、蚊に刺されることも感染原因となる。世界保健機関(WHO)は、南アフリカへの旅行に対して規制の勧告は行っていないが、特に農場や動物保護区に行く者は、動物組織や血液との接触を避け、未殺菌、非加熱ミルクや生肉の摂取をしないことを勧めている。全旅行者に対し、長袖長ズボンの着用や防虫剤、蚊帳を使用するなどして、蚊や吸血昆虫に刺されないよう注意を呼びかけている。また、ドイツ保健当局は、南アフリカ旅行から帰国したドイツ人の予備的診断ではRVFであったが、その後の追加検査により、この症例はRVFではなくリケッチア感染であったと報告した。
75	ウイルス感染(リフトバレー熱)	ProMED-mail 20100519.1658	南アフリカEastern Cape州ではリフトバレー熱が急速に広まっており、現在、州にある45農場において発熱が認められ、更なる検査結果が出るのを待っている。ヒトでは8例が確定しており、リフトバレー熱は動物やその血液、または蚊の媒介によってヒトへ広がる可能性がある。ヒト確定8例のうち2例は獣医師であり、5例は農場従事者、1例は罹患肉と接触して感染した疑いがある。当局は、病気拡散を防ぐために、家畜動物への予防接種といった防御措置を執るよう農場主へ警告している。
76	ウイルス感染(リフトバレー熱)	The Botswana GAZETTE.com/Week.30.Jun.2010	ボツワナ共和国RAMOTSWA村Seribe cruchにおいて、リフトバレー熱の発生第1例が母ウシが流産した複数のウシ胎児から検出された。
77	BSE	Emerging Infectious Diseases 16 (7); 1151-1154 2010 July	非定型であるL型BSE(bovine spongiform encephalopathy)の末梢神経の発病機序を明らかにするため、実験を施した畜牛から採取した神経およびリンパ組織におけるプリオン分布を調べた。古典的BSEプリオンと同様に、L型BSEプリオンは、中央および末梢神経組織に蓄積した。
78	BSE	PLoS Pathogens 6(3); e1000800; 2010 March	プリオン病はPrP(prion protein)の蓄積などに特徴付けられ、このPrPは GPI(glycosylphosphatidylinositol)アンカーによって細胞膜に接着している。このGPIアンカーが典型的なスクレイピーの症状発現に必要であることは、ヘテロ接合体トランスジェニックマウスから確かめられている。本研究では、非接着のPrPが2倍発現しているホモ接合体トランスジェニックマウスを用いた結果、接着PrPのみを発現している非トランスジェニックマウスと比較して、スクレイピー感染はユニークな症状および神経病理の変性を伴う新たな致死性疾患を誘発した。また、脳移植実験から、接着PrP発現が灰白質の海綿状変化に必要であることが示唆され、感染したトランスジェニックマウスにおける電子・光学顕微鏡検査は典型的なプリオン病では認められない発病過程を示した。
79	BSE	PLoS ONE 5(4); e10310; 2010 April	プリオン病の感染因子は中枢神経システムおよびリンパ組織の異なる領域をターゲットとする能力に違いがある。畜牛および小反芻動物から種々のTSE(transmissible spongiform encephalopathies)に脳内感染した、ヒツジプリオン蛋白を発現するトランスジェニックマウスの脾臓におけるPrP ^{res} (protease-resistant prion protein)がウエスタンブロットで解析された。脾臓PrP ^{res} は古典的BSE及び多くの天然(natural)スクレイピー感染源で継続的に検出され、脳内PrP ^{res} と類似した電気泳動上の特徴を示した。一方、脾臓PrP ^{res} はL型BSEおよびウシTEMを接種したマウスもしくはCH1641スクレイピー株には検出されず、いくつかのTSE株は脾臓指向性が低いことが示された。(これらを接種したマウスにおける脳内ではPrP ^{res} 陽性であった)。これに対し、6つの「CH1641様」スクレイピー株に感染したマウスの脾臓には、PrP ^{res} が継続的に検出されたが、脳で特定された分子の特徴とは明らかに異なっており、マウスの脳もしくはリンパ節内で増殖するために、異なる能力を有する混在した蛋白を含んでいることが示唆された。
80	BSE	ウイルス第59巻 第2号 155-166 2009	ヒトの場合、1)全体の8-9割を占める孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)、2)プリオン蛋白質の遺伝子変異による家族性プリオン病、3)病原体プリオンに汚染された医療器具、生物製剤あるいは食物を介した感染を原因とするプリオン病が知られている。中枢神経系に蓄積する異常型プリオン蛋白質(PrP ^{Sc})は病原体と等価であると考えられており、感染型プリオン病患者に由来するPrP ^{Sc} のみならず、孤発性/家族性患者のPrP ^{Sc} も基本的に感染性を持つ。ウシ海綿状脳症(BSE)プリオンの経口摂取が原因の変異型CJD(vCJD)は1996年に英国で確認されて以来、世界で215名の患者が発生している。(2009年9月現在、英国NCJDSUデータ)。孤発性CJDと異なりvCJDでは脾臓や扁桃にもPrP ^{Sc} が検出される。このことから、潜伏期のvCJD患者がドナーとなる輸血の安全性が以前から論議されていたが、輸血が原因と疑われる2次感染が英国で5例確認された。

81	クロイツフェルト・ヤコブ病	ANN NEUROL 2010;68:162-172	新規の弧発性プリオン蛋白質疾患の特性解析について報告された。プロテアーゼ感受性プリオン(PSP ^r)の新規の2遺伝子型、メチオニン同型接合(129MM)とメチオニン/バリン異型接合(129MV)が報告された。2008年に報告された新規のプリオン病の被験者11人はプリオン蛋白質(PrP)遺伝子のコドン129が全員バリン同型接合(129VV)であった。129MM、129MV、129VVの被験者15人について、罹患期間(22~45ヵ月)は129VVと129MVの被験者で有意に異なった。PrP電気泳動プロファイルと共に他のほとんどの機能は同様であったが、主な違いは疾患関連PrPのプロテアーゼ消化の感受性であり、129VVは感受性が高いが、129MVと129MMでは低いか、あるいは全くない。この違いにより可変プロテアーゼ感受性プリオン症(VPSP ^r)と呼ばれるようになった。被験者のPrP遺伝子コドン領域に変異はなかった。3つの129遺伝子型が全て関係し、区別でき、表現型として関係するので、VPSP ^r は2番目の弧発性プリオン蛋白質疾患になる。この特徴は1920年に報告したクロイツフェルトヤコブ病に似ていた。しかし、VPSP ^r は異常プリオン蛋白質の特性において典型的なプリオン病と異なり、恐らくゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー疾患の亜型と類似している。
82	クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20100405.1091[7]	米国テキサス州におけるCJD患者についての報告である。過去に治療歴のないヒスパニック系女性に、14ヵ月に亘り進行性精神状態の変調、全身衰弱、歩行不能、食欲減退、会話不能、振戦および失禁が出現した。本症例は2009年2月までは健康であったが、物忘れや攻撃性が増し、夏の間受診した際には、気分障害の徴候があるとして投薬(Seroquel・Lexapro)されたが、効き目はなく、身体状況は悪化を続けた。本症例は約6年前まで、屠殺されたウシとバックの準備をするラインで働いており、ウシの安楽死の際に、脳と脳脊髄に曝露されていた。本症例は、テキサス州Mesquiteで2010年2月6日に38歳で死亡した。
83	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	EMA CHMP 2010 June 24	2003年2月に公表され、2004年6月に改訂されたクロイツフェルト・ヤコブ病と、血漿由来医薬品及び尿由来医薬品についてのCPMPの見解(EMA/CPMP/BWP/2879/-02)の第2改訂版(案)であり、2010年9月30日まで意見を公募している。累積した疫学的エビデンスは、血液成分あるいは血漿由来製品による弧発性・家族性・医原性CJD感染を支持していない。ドナーの弧発性・家族性・医原性CJDが供血後に確認された場合、血漿由来製品の回収は妥当でないという以前からのCHMPの方針に変更はない。尿由来製品についてCJD、vCJDが感染したという疫学的なエビデンスはない。予防的措置として採血と同じドナーの選択基準を適用する。
84	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	FDA/CBER Guidance for Industry (CJD) 2010 May	2002年1月に発出された同タイトルのガイダンスに、2006年8月に修正案が公表された。今回のガイダンスは、次の事項について、更新情報を提供し、輸血用血液製剤および血漿分画製剤製造業者に対し、供血停止基準・献血後情報に基づく回収等の対応について包括的な指針を与えている。①1980年以降、フランスで血液または血液成分の輸血を受けた者の供血停止勧告(2006年ガイダンス案)を最終化した。②科学的な知見の更新③輸血用全血と血液成分のラベリング改訂(回覧書について)
85	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Haemophilia 2010;16:305-315	英国の血液製剤による感染と遺伝性出血性疾患患者における英国の血液製剤による影響のリスクを低減する為の対策について報告された。vCJDの発生後、感染及び二次感染拡大のリスクを最小限に抑えるため、2004年に供血後にvCJDを発症したドナーから採取された血漿を含んでいるかどうかに関わらず、1980年から2001年までの間に英国でプールされた血液凝固因子製剤を投与された患者全員に予防措置が実施された。以降、英国におけるvCJDの新規症例は減少し、過去に関係する血液または血液製剤の投与を受けたvCJD患者は見つかっていない。しかし一般母集団における無症候性vCJD感染の有病率は不明であり、適切かつ有効なvCJDのスクリーニング検査はない。血友病患者において最近確認された1例目の無症候性のvCJD感染症例ならびにメチオニン/バリン異型接合患者におけるvCJD報告は、遺伝性出血性疾患患者を含む「リスクのある」集団において、継続調査が必要であることを示している。
86	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20100107.0076 [4]	ポルトガルでvCJD病の診断および確定された初症例の臨床・剖検所見の報告である。発病は11歳と最も若い報告例であり、経過は32ヵ月と比較的長期であった。ウエスタンブロットの結果、プロテアーゼ抵抗性プリオン蛋白質を示し、主に4型(2B)アイソフォームであった。広範なニューロン欠損が視床および橋灰白質に認められ、小脳は顆粒細胞の重大な欠損、プルキンエ細胞の中程度の欠損およびプリオン蛋白質の顕著な免疫抗体陽性を示した。
87	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20100205.0386	2010年におけるプリオン病に関する更新情報である。 1: 英国: 2010年2月1日現在の月間統計において2010年で初のvCJD死亡例が報告された。 2: 仏国: 2010年2月2日現在の月間統計が発表された。 3: 米国プリオン病センターにおける2009年12月31日現在の症例報告。 4: 米国におけるCJD/vCJDサーベイランスの報告 5: [Genetic Engineering and Biotechnology News]正常タンパクが、いかに致死的な脳病変を引き起こすプリオンに変るかについて検証した研究報告が発表された。組換えマウスプリオン蛋白質(PrP)が用いられ、マウスの脳に注入後マウスは130日以内に発病し、このマウスの脳組織も同様に他のマウスへの感染性が確認された。プリオン病の感染源は、異常に折りたたまれた蛋白質(misfolded protein)であることが実証された。

88	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20100405.1091[1]	英国CJDサーベイランスユニットの月間統計によると、2010年3月1日現在、確定もしくは疑いvCJD患者の死亡数は168名のままであり、4名の確定もしくは疑い例は生存しており、総数は172例である。2010年、これまでに、1例の死亡例のみが報告された。2010年の最初の3か月間では、39例が照会され、15死亡例が孤発CJD、1死亡例がvCJDであり、家族性および医原性CJDもしくはGSS(Gerstmann-Straussler-Scheinker disease)症例はなかった。
89	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	Transfusion. 2010 May;50(5):1003-1006.	現在までに、後に変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)を発症した患者からの輸血によるvCJD感染例が4例報告されている。共通の供血者から輸血された可能性が示唆された症例は2例(症例A及びB)であった。症例Aは1989年に新生児特別治療室で4回の輸血歴があり、2006年、vCJDと診断されて6か月後の18歳で死亡。症例Bは1993年6月と10月に2回の輸血歴があり、1998年にvCJDを発症し、41歳で死亡。合計103名の供血者の血液に曝露していた。症例Aと症例Bがいた両病院は同じ血液センターから供血血液の配給を受けていた。症例Bが曝露していた供血者103名中99名が症例Aへ輸血された後も、20年以上生存しているか、あるいはCJD以外の要因で死亡していた。vCJDを発症していない供血者から輸血を受けた症例AとBの2症例がvCJDを発症したことから、vCJD感染のパターンとして食事を通してBSEに感染した可能性も考えられる。
90	ブドウ球菌感染	ProMED-mail 20100220.0585[1]	オランダにおけるブタ農場とブタの検査で、農家の20%以上、屠殺場のブタ39%にMRSA ST398の陽性が認められた。現在ST398はオランダだけでなく、いくつかのヨーロッパ各国、カナダ、シンガポールで人感染症となっている。家畜はMRSAの主要な感染源であると考えられる。
91	ブドウ球菌感染	ProMED-mail 20100220.0585[2]	ベルギーのブタ農場49カ所の労働者について評価した。48人(37.8%)がMRSA ST398のキャリアー、1人(0.8%)が皮膚感染症を伴っていた。危険因子はブタによるMRSA伝播、ブタ並びにペットとの日常接触などである。
92	ブドウ球菌感染	ProMED-mail 20100313.0821	カナダにおいて、当初ブタにおいて認められたLA-MRSA (livestock-associated-methicillin-resistant Staphylococcus aureus)のヒト感染がEmerging Infectious Diseasesに報告された。カナダの2都市に住むヒトのMRSA検体3,687株のうち5株がLA-MRSA株であり、うち4株は皮膚および軟部組織感染者由来であった。カナダの一般のヒト集団におけるLA-MRSAの検出率は低い、農業従事者や獣医師における検出率は高く、また、宿主動物が広いことから、LA-MRSAを注視する必要がある。
93	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20100430.1398	ベトナムニュースで、ブタ連鎖球菌の感染例4例について報告された。4症例中2例は人工呼吸器が必要であった。高熱、下痢、乏尿、皮膚に出血性壊死の斑点の症状が認められた。
94	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20100526.1751	ベトナムにて、ブタの新鮮血puddingの摂取後に下痢、高熱、痙攣及び皮膚出血を発現したと報告された。症例はQuang NgaiからHueの医療機関に搬送されたが死亡した。
95	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20100529.1788	2010年5月29日、ベトナムにおいて、ブタからのヒト感染症例2例が報告された。1例は、2010年5月24日、Streptococcus suisによる死亡であると考えられる症例。2例目は52歳女性、2010年5月26日に豚繁殖・呼吸障害症候群PRRSにより死亡との間違った情報を発信していたことが判明し、翌週Streptococcus suisに修正されたものである。
96	レンサ球菌感染	Surg Infect 2010;11(2):179-181	ブタ連鎖球菌(血清型2型)が原因の敗血症性関節炎を合併した菌血症と重症敗血症の症例が報告された。患者は、発症前に未加工の豚肉の接触歴があった。起因菌であるブタ連鎖球菌は血液培養及び吸引した滑液から単離された。患者の腹部大動脈瘤から組織を採取し、PCRを行った結果、起因菌はブタ連鎖球菌(血清型2型)と同定された。ブタ連鎖球菌のヒト感染は既に報告されているが、ブタ連鎖球菌による真菌性大動脈瘤は初めての報告である。
97	レンサ球菌感染	第56回日本化学療法学会東日本支部 総会2009年10月 30-31日	Streptococcus suisはブタの上気道に常在するグラム陽性球菌であり、ブタのみならずヒトに髄膜炎、敗血症を含む致死率の高い侵襲性感染症を惹起する。タイ国立予防衛生研究所(NIH)は2006年から2008年9月までに国内の侵襲性感染症ネットワークを介して収集された血液、骨髄由来のレンサ球菌1,154株から177株のS.suisを同定し、分子疫学的検討を実施した。その結果、ヒト由来S.suis177株(93.2%)がS.suis serotype2、12株(6.8%)がS.suis serotype14と判明した。MLST(Multi Locus Sequence Typing)解析から、SS2の63%がsequence type1(ST1)、24%がST104であり、SS14は新ST1271株以外を除いてすべてST105であった。SS2についてはST1はベトナムでも検出されているが、ST104については他に報告がなく、タイ固有の株と考えられる。また、SS14についてはPFGE解析(pulsed field gel electrophoresis)からST105の北タイにおけるクローナルな伝播が示唆された。結論として、主に散発例としてST104、ST105のタイ固有の菌株による症例が発生していることから、北タイにおける伝統的食習慣であるブタの生肉、生血のリスクが示唆された。

98	レンサ球菌感染	日本化学療法学会雑誌 58(1),32-33,2010	タイ国立予防衛生研究所(NIH)が実施する国内の侵襲製感染症ネットワークを介して収集した血液、髄液由来のレンサ球菌検体の生化学的・分子疫学的調査について報告された。2006年から2008年9月までの期間に国内レンサ球菌1154株から177株のS.suisを同定し、うち93.2%が血清型2型であったが、12株(6.8%)は血清型14型であった。血清型2型のうち24%がST104であり、これは他国では報告がなくタイ固有の株と考えられる。また血清型14型については、ST1271株を除く全てがST105であった。ST105についても北タイ固有のクローナルな伝播が示唆された。さらに血清型14型感染の12例の臨床増は髄膜炎(58.3%)、敗血症(25%)、敗血症性関節炎(25%)、硬膜外・硬膜下腫瘍(8.3%)であった。以上の患者にはブタへ職業的曝露がないことから、生肉の摂取あるいは調理時の感染が可能性として考えられる。また北タイにおける伝統的食習慣であるブタ生食のリスクを周知徹底することが急務である。
99	炭疽	ProMED-mail 20091210.4209	ジンバブエでは、ウシに、死亡3例を含む炭疽病のアウトブレイクが発生し、国連に報告が成された。また、アウトブレイクは、2例の小児および1例の大人の死亡、および60,000頭のウシを炭疽感染の脅威に曝している。(報告日:2009年12月10日)
100	炭疽	ProMED-mail 20091227.4365	ジンバブエでは、死に至る炭疽病のアウトブレイクの後、ヒト1例およびウシ25頭が死亡した。病気の広がりを阻止する対策として、農水省は、感染地域におけるウシ100,000頭以上の予防接種プログラムを実施した。(報告日:2009年12月27日)
101	炭疽	ProMED-mail 20100302.0688	フィリピンのCagayan州で死亡したカラバオの肉を食べた後、1人が死亡、少なくとも400人以上が炭疽病に感染した。死亡した男性は心臓病で亡くなったが、炭疽病の影響による悪化が疑われている。Lasam townでの炭疽病による死亡例は初めてであり、400例はほとんど回復し、残る13名が病院で観察下にいる。
102	炭疽	ProMED-mail 20100405.1095	インドネシアSulawesi南部の村では、炭疽病の汚染が確認された牛肉を食べ発病した。5人が食べたウシの内臓を検査した結果、炭疽病に陽性であった。ウシの屠殺に関与した3名は死亡し、1名の妊婦女性は下痢症状を呈し、農場主は重篤な掻痒症状が出現した。この村のウシは近隣の村から運ばれたが、その運搬から約2週間後、1頭のウシでも炭疽病陽性が検出されていた。
103	炭疽	ProMED-mail 20100414.1211	Dongzhuang村Zhuzhule farmでブタが死亡(原因不明)した。疫学的調査、臨床症状及び病因調査にて、炭疽が確認された。当該農場のブタ101頭は屠殺された。
104	炭疽	ProMED-mail 20100508.1493	インドのWest Bengalで炭疽病のアウトブレイクにより2名が死亡し、50名以上のヒトが感染した。近年、この地方では初めてのアウトブレイクである。32家族からなる約150名が死亡したウシを食べ、その直後、数名が皮膚損傷や高熱に至り、重篤となった2名は大学病院を受診したが、死亡した。
105	炭疽	ProMED-mail 20100531.1805	ケニアCentral Provinceでは、炭疽病アウトブレイクが疑われた後に、2名が病気の動物を食べ死亡した。病気のウシが2010年3月に屠殺されたが、同じ症状のウシが5月に屠殺された際には、男性がこの牛肉を食べ死亡し、2人目の男性も死亡したことから、動物が炭疽病に感染している脅威が浮上している。最初の犠牲者は病院で死亡し、検査では炭疽病の徴候を示した。死亡者の息子は重体である。当局は、病気の徴候を示す住民は早急に医療機関を受診するよう要請し、検査されていない肉や病気の動物の肉を食べないように、注意喚起している。
106	炭疽	ProMED-mail 20100707.2260	ウガンダ共和国のButuntmulaにおいて、Kasaala教会区の豚が下血後に死亡したとの報告を受け、Luwero地区獣医当局は疾病の特定は出来ていないが、炭疽菌を警戒している。
107	炭疽	ProMED-mail 20100725.2496	2010年、米国North Dakotaでウシに今年で3例目の炭疽症例が確認された。本症例はBarnes郡であり、7月上旬にDickey郡で1例、5月にSioux東部郡で1例が報告されている。North Dakotaでは毎年数例の炭疽症例が認められている。2005年に炭疽により推定1000頭のウシ、バイソン、ウマ、ヒツジ、ラマ、及び農場のシカが死亡している。
108	炭疽	ProMED-mail 20100824.2974	2010年8月24日、米国North Dakotaで多数のウシに炭疽感染が認められたと報告された。当該症例以前にはBarnes郡、Dickey郡及びSioux東部郡で炭疽感染のウシが確認されている。
109	炭疽	www.bdnews24.com Sep 20th, 2010	バングラディッシュのChuadangaにおいてヒト炭疽菌の初の症例が報告された。ウシを摂取後に、発症した症例である。当該症例の家族に対して検査を実施したところ、2症例に疥癬が確認された。なお、最初の炭疽菌感染は、8月18日、Sirajganjの26例に認められている。
110	炭疽	www.nation.co.ke/News_May_28_2010	ケニアのMurang'a地区において2例の死亡例が報告された。2例はいずれも病気のウシを摂取した後に死亡している。うち1例は、臨床検査で炭疽菌が確認された。

111	結核	Chest 137(5) 1065	台湾において、2008年1月から2009年1月の間に同定された結核の400症例の診療記録のうち臨床的にMTB培養の偽陽性の5例について結核菌感染の確証をするために検査が実施された。結核菌群の遺伝子型同定、散在性の反復した部位、可変数のタンデム反復検査を行ったところ、5例中3例が結核と確定した。そのうち1例は多剤耐性結核菌であった。
112	結核	Int J of Infect Dis 14 102-110 2010	カブール(アフガニスタン)のCURE International Hospital及びCURE Hamly Health Centerにおいて肺外結核(EPTB)のレトロスペクティブな調査が2006年11月～2008年7月の期間(20ヵ月間)で実施された。調査対象118例のうち、リンパ節結核が44例(37.3%)と最も多く、次に中枢神経系での発現が24例(20.3%)であった。118例の男女比は1:2.03であり、2006年のアフガニスタンにおける塗抹陽性肺TB患者及びイラン南東部で報告されたTB患者の男女比と類似していた。他国では肺TB患者は男性が多いことから、アフガニスタン及びイランは珍しい疫学的パターンを示したと説明している。
113	結核	Int J Tuberc Lung Dis 14(2) 247-249 2010	インドの結核患者におけるHIV罹患率は、以前グローバルデータから間接的に見積もられていた。国レベルで、より正確な結核患者におけるHIV有病率の算定を行うために、産科と結核診断センターからのdistrict(区)レベルのHIV調査結果を相関させて、この相関関係を出産前人口に対するstate(州)レベルのHIV罹患率の見積りに適用した。我々は、2007年には結核患者196万人中95240人(4.85%)がHIV感染していたと推定した。
114	結核	J Formos Ned Assoc 109(4)269-277 2010	台湾において、2005年1月から2006年8月の間に、肺結核(TB)の院内診断遅延(IHDD)による危険因子について調査が実施された。IHDDは入院時期と結核療法開始時期との間隔として定義した。IHDDの中央値は7日間であり、IHDDが7日間以上の患者は長期遅延のグループとし、7日間未満は短期遅延グループと考えられた。調査対象193例について、各グループに分け、危険因子を調査した。長期遅延グループの危険因子は喀痰塗抹が陰性の場合、胸部X線において非空洞性病変が見られる場合、胸部の疾患以外で入院した場合、結核治療前にフルオロキノロン系が投与された場合、原発悪性腫瘍、65歳以上の場合であった。TBによる死亡は、喀痰塗抹が陽性であることと関連していたが、IHDDの延長とは関連がなかった。
115	結核	kekaku 85(1)9-16	2009年10月WHOの西太平洋結核の流行状況の報告がされた。2007年における最新のデータで結核症例が推定190万例中93%がカンボジア、中国、フィリピン、ベトナムの4か国に集中していた。また、推定30万人/年が結核によって死亡している。多剤耐性結核症例(MDR)が推定13.5万例であり、そのほとんどが中国であった。
116	結核	Tropical Doctor 40	2003年から2008年の間、インド西部の2つの医療機関に入院した肝硬変患者667例(男性552例、女性115例)を対象に結核の罹患率が調査された。その結果50例が活動性結核に罹患しており、うち46例が男性であった。結核の罹患率は一般患者に比して、肝硬変患者で15倍高く、アルコール依存症患者で顕著に高かった。
117	結核	ProMED-mail 20100614.1989	米国コロラドでウシ4頭にウシ結核陽性が確認された。感染動物の肉は市場に出していない。市販の牛乳は加熱処理にて殺菌されている。
118	結核	ProMED-mail 20100715.2362	2010年7月7日、米国オハイオで予備検査にてPaulding郡の乳牛にウシ結核陽性が確認されたことが報告された。当該陽性例に伴うヒトへの感染はわかっていない。
119	結核	ProMED-mail 20100909.3246	2010年8月13日、United States Department of Agriculture(USDA)はウシ結核感染が同定された農場を区分した。これは、Emmet郡での2例目の感染である。
120	結核	Wkly Epidemiol Rec 85(9) 69-80 2010	2009年12月のWHOにより、2009年3月24日時点における世界の結核発生状況について報告された。2008年の世界の結核感染症例は570万人であり、うち35%がインドと中国における症例であった。全結核患者(アフリカの結核患者の45%を含む)の22%がHIV感染状況を把握している。多剤耐性結核(MDR-TB)は増加傾向にあり、MDR-TBの罹患率が最も高い国は中国、インド、ロシア連邦及び南アフリカの4か国であった。
121	結核	www.who.int/media/centre/news/releases/2010/drug_resistant_tb_20100318/en/index.html	WHOによって、世界の一部地域では結核感染の4人に1人が標準的な薬剤レジメンで治療不可能な結核であることが報告された。2008年ロシア北西部のある地域における新規に結核と診断されたヒトの28%が多剤耐性結核(MDR-TB)であり、これまでに報告されているAzerbaijan、Baku cityの22%を超える頻度であった。2008年の世界各国におけるMDR-TBは44万例であり、そのうち1/3が死亡したと推定されている。MDR-TB症例の約50%は中国及びインドにおける発生であると推定されている。
122	HCV(結核)	Int J Tuberc Lung Dis 14(2) 616-621 2010	台湾において、2004年9月から2008年3月までに標準的抗結核治療中であり、及び肝生化学検査で正常値であった活動性肺結核295例についてレトロスペクティブな調査が実施された。うち25例(8.5%)が肝炎を発症し、肝炎発症患者は有意に死亡率が高かった。多変量解析により、HCV重感染者は、HCV同時非感染者よりもトランスアミナーゼが高値となる可能性が示された。

123	サルモネラ	Euro Surveill 15 2010 (17 June 2010)	2010年5月、フランスにおいて、サルモネラ(S. enterica 4, 12 :i:-)感染患者6例が発生した。2010年の確定患者がこの時点で69人に対し、2009年及び2008年では各37人と8人であり、増加していることが報告された。このアウトブレイクの規模と感染源を特定するために疫学調査が実施された。調査対象は2010年にS. enterica 4, 12 :i:-が分離され、サルモネラ症の症状を呈したフランスの居住者であること、また2010年の第12週から患者が増加していることから、第12週以降に検体が採取された患者90人とした。MLVA法によって、これまでに53/90人のサブタイプが決定され、32人が流行株感染患者であった。サブタイプ確定の53人のうち36人(流行株感染患者24人、散発性患者12人、流行株感染患者2人は二次感染のため解析対象から除外)で、同一の店で買い物をした患者は流行株感染患者20/24人で、散発性患者4/12人であった。また顧客カード番号の調査により、発症前3週間でカードを使用した流行株感染患者9人が同店で同種類・ブランドの豚肉ドライソーセージを購入していた。当該製品は、2010年2月に1バッチを製造するために使用した材料からサルモネラ菌が検出されていたことが分かった。当該バッチは回収され、現在のところ、他の欧州諸国からS. enterica 4, 12 :i:-感染患者が増加したという報告はない。
124	ペスト	ProMED-mail 20100618.2052	中国における腺ペストの報告。Gansuの2010年6月13日、建設作業員1例は感染モルモットを食した後、振え苦しみ、医療機関に来院するも、その数時間後に死亡した。症例は、高熱を発現し、左脇下のリンパ節が腫脹していた。腺ペストと診断された。
125	ペスト	ProMED-mail 20100706.2250	ミャンマーにおけるペストの報告。NaypyidawのBurmese Ministry of Health (MOH)により、不特定数のYangon住民がペストに感染していることが報告された。
126	コレラ	ProMED-mail 20100814.2807	2010年8月14日、パキスタンにおいて、2千万人が歴史上最悪の洪水の影響を受け、国連により第1コレラ症例がスワットの北西地区で確認され、少なくとも3万6千人が急性水溶性下痢(AWD)に苦しんでいることが報告された。
127	梅毒	ProMED-mail 20100224.0612	セアラ州州立大学(Uece-Limoeiro)の生物科学研究者が行った2つの最大州立中学校の若者101名の調査の結果、農村に住む教育の乏しい若者は、性的に伝播したウイルスおよび細菌によって多くが感染したグループを構成している。2009年だけで、出生時に梅毒が確認された8名の乳児は、胎盤を介して母親によって感染した。ブラジル全体では、2009年に2,633例の先天梅毒症例が確認され、2008年には192例であった。13.7倍である。セアラ州では2009年に217例が確認され、2008年では13例であった。
128	リケッチア	CDC/MMWR 58(45); 1267-1270 2009 November 20	発疹熱は発疹熱リケッチア病原体によるノミ媒介性リケッチア疾患であり、発熱、頭痛、寒気、嘔吐、悪心、筋肉痛および発疹などの症状を示す。テキサス州南部は発疹熱を風土病とするが、州中央部のオースティンでは過去10年間に2例しか報告されていない。2008年8月8日、Austin/Travis County Department of Health and Human Services(ATCDHHS)からTexas Department of State Health Services(TDSHS)へ発疹熱(murine typhus)の血清学的所見を示す14例に関して報告があり、その後、12月1日までに計53例の報告があった。うち確定例は33例(62%)、1例がPCR法およびDNA塩基配列分析によりR. typhi感染症と確認された。症状は軽度から重症に亘り、患者の73%が入院を必要とした。感染源はフクロネズミおよび伝播に関連する国内動物が示唆されるが、不明である。発疹熱の検出を増やし、感染のピークである3-11月の前および期間中に、警告の通達を通して適切な対応および防御措置を伝達する必要がある。
129	リケッチア	ProMED-mail 20100918.3376	米国Kansas, Nebraska及びIowaにおいて、ウシの感染症の原因であるアナプラズマ感染が急増する季節であるため、ウシ生産者にアナプラズマ感染を警戒するよう説明された。
130	細菌感染	Agence France- Presse 2010/08/14	ベルギーにおいて、南アジア起源の薬剤耐性のsuperbugによる死亡1例が報告された。当該症例は、パキスタンを旅行中、交通事故にて足を負傷し、パキスタンの病院で治療を受け、ベルギーに帰国後死亡した。新規に同定されたNew Delhi metallo-β-lactamase 1 (NDM-1) 遺伝子を有する細菌に感染していた。2症例目はモンテネグロを旅行中に事故に遭い、入院後感染したが、ベルギーで治療を受け回復した。
131	細菌感染	Lancet 2010; August 11 online	インド、パキスタン及びイギリスにおいて発現が認められた、広い抗生物質耐性をもたらすニューデリー・メタロ-β-ラクタマーゼ (NDM-1) について分子学的、生物学的及び疫学的調査が行われた。インドの2地域 (Chennai及びHaryana) から分離された腸内細菌について、抗菌の感受性を評価し、カルバペネム耐性遺伝子の発現をPCR法で確認した。NDM-1を有する株が、Chennaiから44株、Haryanaから26株、イギリスから37株またインドの他地域及びパキスタンから73株分離された。NDM-1は主に大腸菌や肺炎桿菌において確認され、チゲサイクリンやコリスチンを除く多剤に耐性を示す。ほとんどの株のプラスミド上にNDM-1遺伝子が組み込まれており、Chennai及びイギリスの分離株のプラスミドは容易に伝達された。イギリスのNDM-1陽性患者の多くが過去にインドまたはパキスタンに渡航歴があるか、これらの国に関連があったと報告されている。
132	細菌感染	Southeast Asian J Trop Med Public Health 41(3) 647- 652 2010	インドのアッサムにおいて、2009年5月から7月までに、小規模のジフテリアのアウトブレイクが生じ、13症例(うち4例死亡)が報告された。症例の平均年齢は21.8±10.5歳(5歳以上)、共通の症状は微熱、喉の痛み、扁桃腺の偽膜であった。死亡率は30.8%であった。1症例に神経系症状(口蓋骨の麻痺、多発性神経炎)の合併症が認められた。いずれの症例に対してもジフテリア抗毒素は投与されていなかった。

133	細菌感染	http://www.voanews.com/khmer-english/news/Mystery-Pig-Deaths-Spread-Through-Three-Provinces-99772079.html	カンボジアのBattambangとKampong Chamでは無数の豚が死亡しており、Kampotの南部の州では150頭近くの豚が死亡した。保健当局では原因は細菌によるものであり、新型インフルエンザH1N1の可能性は低いと報告した。当局はKampotの7頭の豚に対して血液検査を開始した。
134	真菌感染	PLoS Pathogens 6(4); e1000850; 2010 April	Cryptococcus gattiiは、従来、熱帯・亜熱帯性真菌と考えられていたが、1999年にカナダ、バンクーバー島で大流行し、現在においても隣接するカナダ本土ブリティッシュコロンビアや米国本土においてヒトや動物に感染し続けている。この大流行はVGII型、特にVGIIa/majorが原因であったが、加えて、オレゴンで新しい遺伝子型(VGIIc型)が出現した。MLST及びVNTR解析によって、新型VGIIc及びVGIIa/majorは、マクロファージやマウスに感染し、強毒性を示すことが分かった。
135	アメリカトリパノソーマ症	J Infect Dis 201(9) 1308-1315 2010	Trypanosoma cruzi(T.cruzi)は媒介動物の糞便によって汚染された食物から経口感染する。アメリカ大陸での急性シャーガス病CDのアウトブレイク時において、ベネズエラでコホート疫学研究が実施された。曝露された1000名中103名に感染が確認され、そのうち75%に症状が認められ、20.3%が入院を必要とした。また59%は心電図異常を示し、44名(子供1名)に寄生虫血症が認められた。臨床的な特徴は媒介による感染で見られるものと異なっていた。子供は感染率が有意に高かった。疫学的な調査から、汚染した生グアバジュースが唯一の感染原因とされた。当該アウトブレイクは大都市部で主に若年齢を中心とした健康に問題のない集団における感染という、先例のない珍しいものであった。
136	マラリア	第79回日本寄生虫学会大会2010年5月20-21日	ベトナムカンホア省カンフー地区において、サルマラリアPlasmodium knowlesiが住民間でヒト-ヒト感染を起こしている可能性を示唆する事実を見出した。
137	ジアルジア症	第79回日本寄生虫学会大会2010年5月20-21日	ウシにおける原虫のDNA検出状況と遺伝子型の調査結果について学会で報告された。2歳未満のウシ370頭から得られた糞便検体において、Giardia intestinalis(Gi)、Enterocytozoon bieneusi(Eb)、Encephalitozoon interstinalis(Ei)の3原虫のDNA検出状況と遺伝子型について調査を行った。その結果、Giについて、23検体(6.2%)が陽性であり、11検体がgdh遺伝子型のE型、及び5検体がA型で、残り7検体は今まで知られている遺伝子型と異なっていた。Ebについては、19検体はウシ特異的遺伝子型、8検体は人獣共通感染症の遺伝子型、1検体が両遺伝子型であった。Eiについては、全ての検体が陰性であった。本調査において、日本のウシから初めてEbを検出し、本原虫が広く蔓延している可能性が示唆された。また、Gi及びEbでは、人獣共通感染症の遺伝子が検出され、保虫宿主としてウシの重要性が示唆された。
138	微胞子虫類感染	第79回日本寄生虫学会大会2010年5月20-21日	ウシにおけるジアルジア原虫(1種)及び微胞子虫類(2種)のDNA検出状況とその遺伝子型について調査した。日本のウシで初めてEnterocytozoon bieneusi(微胞子虫類)を検出し、本原虫が広く蔓延している可能性を示唆した。
139	Q熱	Clinical Infectious Diseases 50(11) 1433-1438 2010	2005年6月28日、イスラエル中央部の都市部で、全寮制高校の生徒及び職員の322名において多数の熱性疾患(発熱、頭痛、発汗など)症例が報告された。その後の調査で、その2週間前に大規模なQ熱アウトブレイクが発生していたことが分かった。Q熱疾患の危険因子特定するため、症例対照研究が実施された。2005年6月15日～7月13日の間に、303名中187名(62%)が体調不良の報告をしており、血清学的検査を実施した164名中144名(88%)に、C.burnetii感染が明らかとなった。Q熱感染の重大な危険因子は、学生であること、学校の食堂で定期的に食事をしたこと、6月の宗教上の休日期間並びにその前の週末に寮にいたことであった。PCR法により学食の空調からC.burnetiiDNAが検出され、空調を介して病原体に空気感染したことが示唆された。
140	Q熱	ProMED-mail 20100220.0583[2]	2010年2月16日付けのQ熱状況における、農務省および厚生省からオランダ議会への書簡についてであり、以下の6つの返事が重要な追加として掲載された。①罹患者と酪農でない農場の集団における関係について要求した情報、②動物へのワクチン接種の更新されたポリシーに関する求められた情報、③他のEU加盟国におけるQ熱状況はどうか、④処分手順の検査及び調査での返答、⑤2010年の間、届け出のあったQ熱のヒト症例に関して：RIVM-CIb(The national Institute for Public Health and Environment)は、17の地方Health Servicesから2010年1月1日以降受け取った、2007年-2010年初期に発症した136症例の報告を受け取った、⑥Q熱の公衆衛生観点における調査に関して
141	感染	FDA/Vaccines, Blood&Biologics (Compliance Actions 2010 February 19)	2010年2月19日、FDAは幹細胞を含む臍帯血の処理および保管を行うNewborn Blood Banking, Inc.に対し、施設査察(2009年10月14-28日)を実施した結果、FDAは、21CFR(Code of Federal Regulation) Part1271に違反しており、HCT/P(human cells, tissues and cellular and tissue-based product)の使用による伝染性疾患の伝播リスクに対する適切な措置を講じていないと判断した。このHCT/P違反は、健康被害を招く根拠があると当局は決定し、本製造停止命令はこの命令書の日付から効力をもつ。内容は、①FDA基準の遵守が到達されFDAから書面の交付があるまで、すべての製造を即時中止する、②2005年5月25日もしくはその日以降に回収した(この命令の日付後に会社が保有するもしくは受領した)HCT/Pの流通禁止、③2005年5月25日もしくはその日以降に回収した(この命令の日付後に会社が保有するもしくは受領した)会社が保有する全HCT/Pを、21CFR 1271.260に遵守して保存する。

142	感染	FDA/Vaccines,Blood&Biologics (Workshops, Meeting&Conferences)	FDAは「新興感染症(EID):輸血・移植の安全性に関する対策の評価」と題した公開ワークショップ(2010年5月11-12日)を開催する。目的は、EIDに関する同定・優先順位付け・EID対応に用いられている戦略を再検討する事である。開催初日は、輸血の安全性に焦点を絞り、1)米国内外におけるEID因子の同定・監視・優先順位付け 2)リスク評価の方法論 3)EIDに対応するツールが討議され、二日目は、臓器・細胞および組織移植の安全性について討議され、1)細胞・組織および臓器移植に関する規制の枠組み 2)米国内外におけるEIDの同定および評価へのアプローチ 3)リスク評価の方法論 4)現在の調査優先事項・限界および機会
143	感染	ProMED-mail 20100411.1172	ペルーのChepenとPacasmayoにおいて、約100頭の豚が血液循環の問題と考えられる青黒色の斑点を示す稀な病気に感染し、その多くが死亡した。臨床像から豚コレラ、あるいは豚丹毒と推定されている。
144	感染	WHO Recommendations (Screening Donated Blood for Transfusion-transmissible Infections)	輸血伝播性感染症に対する血液スクリーニングについてWHOより文書(推奨)が発出された。血液スクリーニング方式をより開発するために、スクリーニング戦略、財政と人資源、分析と実験室システム、必需品の調達、保存、輸送及び調節機構などについて推奨内容が提示された。技術的な側面から、スクリーニング分析法(イムノアッセイ、核酸増幅技術分析法)について、適切な分析法の選択、分析能の評価とモニタリング、自動化の使用について考慮すべき事項が提示された。また、多岐にわたる感染症およびスクリーニングのためのガイドラインが提供されている。
145	感染	第79回日本寄生虫学会大会2010年5月20-21日	赤痢アメーバはヒト以外の霊長類にも感染されると考えられていることから、ニホンザルにおける赤痢アメーバの分離とその性状解析について報告された。ニホンザル糞便から形態的に赤痢アメーバや非病原アメーバE.disparと区別できないアメーバを検出し、分離培養した培養虫体の塩基配列解析からE. nuttalliと考えられた。分離培養虫体はハムスターの肝臓に接種すると腫瘍を形成することから、病原性を有すると考えられた。E. nuttalliは日本に分布する新たな病原アメーバ種として注目する必要があると説明している。
146	感染	第85回日本結核病学会総会2010年5月20-21日	ヒト肺Mycobacterium avium complex (MAC)症は特に先進国で増加していることから生活環境が感染源として寄与していると考え、家庭のMACの分布を調べた。MAC以外の抗酸菌に対し、MACは浴室からのみ分離され、また健康人浴室より患者浴室から有意に高頻度に分離された。MACを分離した浴室、及び同一試料内からコロニー形態が異なる複数株を分離した試料について、PFGE解析(pulsed field gel electrophoresis)を実施した結果、MACは浴室内で多クローン性に増殖していることが示された。また、浴室分離株と当該浴室を利用する患者の喀痰分離株の遺伝子型は、38%の相同性を示した。一方、家畜からヒトへの感染の危険性については、患者分離株とブタ分離株の血清型を液体クロマトグラフィーで分析したところ、各血清型分布は著しく異なり、ブタとヒトの感染経路はそれぞれ独立した経路であると考えられた。以上の結果から、ヒト肺MAC症はブタから感染する可能性は極めて低く、浴室などの生活環境の寄与が大きいと示唆された。
147	感染	霊長類研究 Primate Res.2010;26:69-71	ニホンザルに特異的に起こる出血症が近年京都大学霊長類研究所において発生している。2001年に2頭、2002年に6頭が発症し、うち5頭が死亡したが、その後6年間発生はなかった。しかし、2008年3月に第1期の疾患と類似する貧血症状を示す個体が発見され、2010年4月までに39例の発症が認められ38例が死亡している。今までのところニホンザル以外でのサル類やヒトでは発症はみられていない。ただし、発症したニホンザルは高い確率で死に至る。経過観察からは何らかの感染症が疑われる。原因が不明で治療法も見つかっていないが、日本固有種であるニホンザルの特異的な疾病であると考えられる。